

『ロード・オブ・ウォー』(LORD of WAR)とは、いわゆる「死の商人」をテーマとした2005年のアメリカ映画。複数の武器商人への取材を元に作られた、ノンフィクションに基づくフィクション映画である。副題は「史上最強の武器商人と呼ばれた男」。

<物語>ウクライナからの移民、ユーリ・オルノフは、ある日リトル・オデッサでロシアン・マフィアの銃撃戦に遭遇する。その光景にショックを受けたユーリは、武器商人の道を進んでゆくが、インターポールの捜査官ジャック・バレンタインは、彼に目をつけていた…。

<題名について>

作中で、ユーリのことを「ロード・オブ・ウォー」といったバプティスト大統領に対し、ユーリが訂正した「ウォー・ロード」には、将軍や司令官という意味がある。逆に、「ロード・オブ・ウォー」という言葉を直訳すると「戦争の支配者」となる。いくら戦争指導者といえども、ユーリのような武器・弾薬の供給者がいない限り、戦争することができないということであって、ここにはユーリのような存在こそが戦争を支配しているという思想がこめられていると思われる。本作は原題と同じ題名で公開されたが、日本では「lord」(君主・王・支配者・酋長などの意)という単語にあまりなじみがないので原題の意味が分かりにくいとされ、複数の邦題候補が挙がっていた(広報担当者も当初は道路の意を持つ「road」と勘違いしたほどである)。結局、アメリカへの皮肉をこめた「アメリカン・ビジネス」に決定し、その邦題での広報なども実際に行っていたのだが、公開ギリギリのところで監督アンドリュー・ニコルから異議を唱えられた。ニコルによると、「別に、アメリカを批判するための映画ではない」「作品の意図が誤解される」ということである。その後の監督と日本サイドとの折衝により、原題での公開と「史上最強の武器商人といわれた男」という副題をつけることで合意した。(「Wikipedia」より)